

夜泣き鉄骨

海野十三

青空文庫

真夜中に、第九工場の大鉄骨が、キーツと声を立てて泣く――

という噂が、チラリと、わしの耳に、入った。

「そんな、莫迦^{ぼか}な話が、あるもんか！」

わしは、検査ハンマーを振る手を停めて、カラカラと笑った。

「そう笑いなさるけどナ、組長さん」その噂を持ってきた職工は、
慄^{おび}えた眼を、わしの方に向けて云った。「昨夜のことなんだよ、

それは……。火の番の、常^{つね}爺^{じい}が、両方の耳で、たしかに、そいつを聴いたよつて、蒼^{あお}い顔をして、此^このおいらに話したんだ。満^まんざら、いつわ
更^{さら}、偽^{いつわ}りを云っているんだア、思えねえ」

いつの間にか、わし達の周^{まわ}りには、大勢の職工が、集つてきた。
「組長さん、それア本当なんだ」別の声がかんた。

「なんだとオ——」おれは、その声のする方を見た。「てめえは、
雲^{うんてき}的^{てき}だな。雲的ともあろうものが、軽^{かる}卒^{はずみ}なことを喋^{しゃべ}つて、
後^{わらわ}で笑れンな」

「大丈夫ですよ——」雲^{うんてき}的^{てき}は大いに自信ありげに、言葉をかえした。「それについちや、ちいつとばかり、手前^{てめえ}の恥^ちも、曝^{さら}けだ
さにやならねえが、もう五日ほど前のことでさア。
徹^{よあかし}夜^し勝^{しょう}負^ぶ

のそれが、十二時を過ぎたばかりに、スツカラカンでヨ、場に貸してやろうてえ親切者もなしサ、やむなく、工場の宿直しゆくちよく、たあさんのところへ、真夜中というのに、無心むしんに來たというわけ。さ、その無心を叶かなえて貰つての帰りさ、通り懸かかつたのが今話しの第九工場の横手。だしぬけに、キーイツという軋きしるような物音を聴いた。(オヤ、何処たちどまだろう)と、あつしは立停しばらつた。暫しばらくは、何にも音がしねえ。(空耳そらみみかな?)と思つて、歩きだそうとすると、そこへ、キーイツとな、又聞えたじやねえか。物音のする場所は、たしかに判つた。第九工場の内部からだッ。(何の音だろう?) 夜業やぎようをやつてんのかな)そう思つたのであつしは、顔をあげて、硝子ガラスの貼つてある工場の高窓を見上げたんだが、内部

は真暗まつくらと見えて、なんの光もうつらない。(こりや、変だ!)
俄にわかに背筋が、ゾクゾクと寒くなってきた。そこへ又その怪しい物
音が……。恐こわいとなると、尚なほ聴きたい。重い鉄扉てつびに耳みみたぶ朶たぶをおつ
つけて、あつしア、たしかに聴いた。キーイツ、カンカンカン、
硬い金属が、軋きしみ合い、噛み合うような、鋭い悲鳴だった」
「大方、工場に、鼠ねずみが暴れてるんだろう」わしは、不機嫌に云い
放った。

「どうして、組長！」雲うんてき的てきはハツキリ軽蔑けいべつの色を見せて、叫
びかえした。「あつしにア、あの物音が、どこから起るのか、ち
やんと見当がついてるのでサ」
「ンじゃ、早く喋しゃべれツてことよ」

「ごう、みんなも聴けよ」彼は、周囲まわりの南瓜面かぼちやづらを、ズーツと睨ねめまわした。「ありやナ、クレーンが、動うごいている音ねさ！」

「なに、クレーンが!!」

一同が、思わず声を合わせて、叫こゑんだ。

クレーンというのは、格納庫かくのうこのように巨大な、あの第九工場

の内部へ入って、高さが百尺近い天井を見上げると判わかるのだが、

そこには逞たくましい鉄骨で組立てられた大きな橋梁きょうりょうのような形の

起重車きじゅうしゃが、南北の方向に渡しかけられている。それが、クレー

ンだった。その橋梁の下には、重い物体をひっかける化物ばけもののよ

うにでつかい鉤かぎが、太い撚より鋼線ロープで吊つつてあり、また橋梁の一いちご

隅うには、鉄板てつばんで囲こもった小屋が載のっていて、その中には、この

クレーンを動かすモーターと其の制動機とが据^すえてあつた。制動機を動かすと、この鉄橋は、あたかも川の中で箸^{はし}を横に流すように、広い第九工場の東^{とうたん}端から西^{せいたん}端まで、ゴーツと音をたてて横に動くのだった。

「おい、政^{まさ}ツ！」わしは、クレーンの運転手をやっている男を、人垣の中に呼んだ。

「へえ——」政は、紙のように、白い顔をして、おずおずと、前へ出てきた。

「クレーンが、真夜中に動き出すてのは、本当かな」

「わたしは、ナなんにも、存^{ぞん}じませんです。しかし、クレーンのスイッチは、必ず切つて帰りますで、真夜中に、ヒヨロヒヨロ

動き出すなんて、そんな妙なことが……」

そこまで云った政は、発作ほっさみたいな様子となり、言葉のあとを
ブツブツ口の中で呟つぶやいて、それから急に気がついたかのように、
ワナワナ慄える両手を、周章あわてて背後に隠したのだった。

「よオし。今夜は、一つ正しょうたい体を確かめてやろう。いいか、み
んな夜中の十二時を廻ったら、裏門前に集るんだ！」

合宿所の、三階の、廊下を、パタパタと音をさせて、近づいてくるあしおと躑音があつた。

「組長さん、おいでですか——」

その躑音は、「しゃかんいま舎監居間」と書いたきくだ木札を、釘で打ちつけてあるわしの室の入口の前で停るが早いか、そう、声をかけたのだつた。

「おう。誰かい」

「くりはら栗原です。そうこがかり倉庫係の栗原ですて」

「栗原？ 栗原が、なんの用だツ」

「へえ、ちよつと工場の用なんで……」

「なにツ。工場の用で、どんなことだか云つてみる」

「へえ、実は——」栗原は、言い淀よどんでいる風だった。「先日せんじつお持ちになりました乙おつがた型スウィッチが、急に入用になりましたんで、いただきに参つたんですが……」

「スウィッチなんか、明日にしろ」

「ところが生あいにく憎、工場で至急使うことになつたんで、直ぐ持つて行かないと困るんでして、実にその……」

「よオし、いま入口を開けるから、ちよつと待て」

暫くして、わしは、入口の扉とを、サツと開けた。

「どうも相済あいすみません」栗原は、わしの顔を見るなり、ペコリと頭を下げた。

「お前、この間、そう云つたじゃねえか。このスウィッチは、当と

うぶんふよう
分不用だから、いつまでもお使いなさい、とな」

「申訳がありませんです」栗原は、ひどく恐縮きようしゆくしている態ていで、

ペコペコ頭を下げた。「組長さんは、スイッチの図面を書きた
いから御持ちになるといので、そんな簡単な御用ならと、栗原
は帳簿に書かないで、御貸したんです。ところが、今急に、拡か
くちよう
張 工事係の方から、在庫ざいこになっている乙おつがた型スイッチは全
部数を揃えて出せという命令なんです。どうも已やむを得ず、ソノ：

…」

「文句はいいや。さア、早く持つてゆけ」

わしは、抱かかえていた乙型スイッチを、彼の前に、さしだした。

乙型スイッチというのは、長さ一尺五寸、幅はば七寸の、細長い

木箱きばこに収められた大きなスイッチで、硝子蓋ガラスを開くと、大理だいりせ石きの底盤ていばんの上に幅の広い銅リボンどうでできた電気断続用だんぞくようの刃はがテカテカ光り、エボナイト製の、しつかりした把手ハンドルがついていた。このスイッチ一つで、鳥渡ちよつとしたモートルの開閉は充分できるのであつた。

「栗原さん、俺が持つてゆくよ」

横の方から、思いがけない、違った声がして、頭髪かみのけをモシヤモシヤにした若い男が、姿を現した。

「だッ、誰だ。手前てまえは……」

わしは、戸口の蔭から、イキナリ飛び出した男に、駭おどろいた。

「こいつは、横瀬よこせといいましたネ」若い男の代りに栗原が弁解し

た。「この栗原の遠縁とおえんのものです」

「何故ひつぱつてきたんだ」

「いまお願いして、倉庫で、私の下を働かせて、いただいでるのです。というのしたまちは、下町の薬種屋やくしゅやで働いていたのが、馘首くびになりましたナ、栗原のところへ、転りころがこんできたのです」

「ふうん、お前さん、薬屋かア」

珍らしそうに、スウィッチの表や裏を、眺めている若い男に、わしは、声をかけた。

「薬屋だったんです」その横瀬は、ぶつきら棒の返事をした。

「どうだろうな。わしは、お前さんに、ちよつと頼みたいことがあるんだが」

「骨の折れねえことなら、手伝いますよ」

「これッ——」栗原が駭おどろいて、横瀬の汚い職工服を、ひっぱった。

「骨は折れねえことだ。じゃ、栗原、お前の若い衆を、ちよいと借りたぜ」

「へえ、ようがす」

栗原は、若い横瀬から、スイッチチの箱をうけとると一人で帰って行ったのだった。

「さあ、こつちへ、入んねえ」

「はあ——」

「わしは、鳥渡ちよつと、お前さんに、見て貰いてえものがあるんだ」

「俺に、判るかなア」

「ものは、これなんだ」わしは、机の抽斗ひきだしの奥から、新聞紙にくるんだものを、出してきた。

「この硝子ガラスで出来たものはなんだね」わしは、それを横瀬に手渡した。

「これは、注射器の一部分ですよ」

「注射器？　そうだろうな、わしも、そう思った。それで、何の注射器か、お前さんに判らないかい」

「さア——」横瀬は、モシヤモシヤ頭かみのけ髪を、指でゴシゴシ掻かいた。「注射器は判るが、尖端さきについての針が無いから、見当けんとうがつかねえ」

「じゃ、此処ここんとこを見て呉れ。この注射器の底に、ほんのり茶

っぽいものが附いているが、これは、なんて薬かい」

「うん、なんか附いてはいるが——」若い男は注射器を、明り窓の方に透かして、その茶色の汚点おてんに眺め入った。「電灯は点きませんか」

「生憎あいにく、この合宿じや、六時にならないと、点かないんだ。まだ三十分も間があるよ」

初夏しよかの夕方は、五時半を廻つても、まだ大分明るかった。

「さあ、わかりませんね。こんなに分量が少くちや見当がつかない。薬品のようでもあり、血痕けっこんのようでもあり……」

わしは、グツと唾つばを呑みこんだ。

「もう一つ、見て貰いたいものがある」わしは、新聞紙包みの中

から、もう一つの品物をとりだした。「これは何かね」

「こんなもの、どつから持って来たんです」横瀬は、ピカピカ光る、その外科道具のようなものを手に取上げ、ニヤニヤ笑いだした。

「何に使う品物かね」わしは、横瀬の質問には答えようとせず、同じことを、聞きかえしたのだった。

「一口に云えば——」と、わしの顔をジロリと見て、「しきゆうきよ子宮鏡うという、産婦人科の道具だね」

「よし、判った」わしは、ピカピカするそれを、横瀬の手から、ひったくるようにして、元の新聞紙の中に、包んでしまった。

「いや、御苦勞あいさつだった」と、わしは挨拶をした。「ところで、

もう一つだけ、お前さんに見て貰いたいものがあるんだが」

「あるんなら、早く出しなせえ」

横瀬は、面倒くさそうに、云った。

「ここには、無いんだ。ちよつと、近所まで附合つてくれ」

「ようがす。ドッコイショ」

横瀬は、「ひびき」を一本、衣ポケット囊から出して口に銜くわえると、

火も点けないで、室内をジロジロと、眺めまわした。

「何を見てるんだ」わしは、訊きいた。

「マツチは無いのかね」と彼は云った。

合宿の門を出ると、溝どぶくさい露路ろじに、夕方の、気ぜわしい人の往来ゆききがあった。初夏とは云つても、遅おくれた梅雨つゆの、湿しめりがトツプり、長坂堀ながいたべいに浸しみこんで、そこを毎日通つている工場街の人々の心を、いよいよ重くして行つた。

道では、逢あう誰だれ彼かれが、挨拶をして行つた。

向うから、見覚えのある若い女が、小さい風呂敷包かかみを抱かかえてやつてきた。

「お前さん」と其の女は、わしの連れを、チラリと睨にらみながら、

云った。「これから、何処へゆくんだい」

「お前こそ、どこへ行くんだい」

「ふん、見れば判るじやないか。今夜は、徹夜作業があるんだよ」
「夜業か。まアしつかり、やんねえ」

「お前さんの方は、どこへ行くのさア」その女は、一步近よつて、云った。

「ちよいと、この仁と、用達しに」

「そうかい、あのネ」女は、口を、わしの耳に近づけて、連れに聞かせたくない言葉を囁いた。

「……」わしは、黙つて、肯いた。

女に別れると、後から、附いてくる横瀬がわしに声をかけた。

「今の若いひとは、なかなか、美しい女ですネ」

「そうかね」

「何て名前です」

「おせい」

「大将の、なにに当るんです」

「馬鹿！」

露路を二三度、曲った末に、わし達は、目的の家の前へ来たのだった。

わしは、雨戸を引かれた、表の格子窓こうしまどに近づいて、家の内部の様子を窺うかがった。幸いこのところは、露路裏の、そのまた裏になつてゐる袋小路ふくろこうじのこととて、人通りも無く、この怪あやしげな振ふるま

舞も、人に咎められることがなかった。とにかく、家は留守と見えて、なんの物音もしなかった。わしは、連れを促して、裏手に廻った。

勝手元の引戸に、家の割には、たいへん頑丈で大きい錠前が、懸っていた。わしは、懐中を探つて、一つの錠をとり出すと、錠孔にさしこんで、ぐツとねじつた。錠前は、カチャリと、もの高い音をたてて、外れたのだつた。

わしは、後を見て、横瀬に、家の中へ入るように、目くばせをした。

障子と襖とを、一つ一つ開けて行つたが、果して、誰も居なかつた。若い女の体臭が、プーンと漂っていた。壁にかけて

あるセルの単衣ひとえに、合わせてある桃色の襦袢じゆばんの襟えりが、重苦しく艶なまめいて見えた。

「いいのかね。こう上りこんでいても」

横瀬は、さすがに、気が引けているらしかった。

「叱しッ——」わしは、睨にらみつけた。

わしは、逡しゆん巡じゆんするところなく、押入をあけた。上の段に入

っている蒲団ふとんを、静かに下ろすと、その段の上に登った。そして、

一番端の天井の板を、ソツと横に滑らせた。そこには、幅一尺ほ

どの、長方形の、真暗あなぐらな窪くぼがポツカリ明いた。そこでわしは、両

手を差入れて、天井裏を探さぐったが、思うものは、直ぐ手先に触

れた。手文庫てぶんこらしい古ぼけた函はこを一つ抱かかえ下ろしてきたときには、

横瀬は呆気にとられたような顔をしていた。

わしは、急製の薄っぺらな鍵を、紙入の中から取出すと、その手文庫を、何なく開くことに、成功したのだった。その中には、貯金帳や、戸籍謄本らしいものや、こせきとうほん 黴の生えた写真や、かび 其他二そなた 三冊の絵本などが入っていたが、わしが横瀬の前へ取出したものは、手文庫の一隅いちくうに立ててあった二〇cc入の硝子壺ガラスびんだった。それには、底の方に、三分の一ばかりの黒い液体が残っていた。「さア、こいつだ」わしはソツと壺を横瀬に渡した。「最後に、お前さんから、教えて貰いたいのは」

「そうだね、これは——」横瀬は、十燭しよくの電灯の光の下に、小さい葉壺を、ふつてみながら、いつまでも、後を云わなかった。

「判らねえのかい」

「うんにや、判らねえことも、ねえけれど」

「じゃ、何て薬だい」

「そいつは、云うのを憚はばかる——」

「教えねえというのだな」

「仕方が無い。これア薬屋仲間で、御法度ごはつとの薬品なんだ」

「御法度であろうと無かろうと、わしは、訊きかにや、唯ただでは置か

ねえ」

「脅かしつこなしにしましょうぜ、組長さん。そんなら云うが、

この薬の働きはねえ、人間の柔い皮膚を浸しん蝕しょくする力がある」

「そうか、柔い皮膚を、抉えぐりとるのだな」

「それ以上は、言えねえ」

「ンじゃ、先刻みせた注射器の底に残っていた茶色の附着物ふちやくぶつは、この薬じゃなかつたかい」

「さア、どうかね。これは元々茶褐色の液体なんだ。ほら、振つてみると、硝子のところに、茶っぽい色が見えるだろう」

「それとも、やっぱりあれは、血のあとか。いや大きに、御苦労だった。こいつは、少ないが、当座とうざのお礼だ」

そう云つて、わしは、十円紙幣さつを、横瀬の手に握らせ、今日のことくちどは、堅く口止めだということくちどを、云いきかせたのだった。

いよいよ、夜は更ふけわたった。

月のない、真暗な夜だった。風も無い、死んだように寂さびしい真ま夜中よなかだった。

かねて手筈てはずのとおり、工場の門衛番所に、柱時計が十二の濁だくお音を、ボーン、ボーンと鳴り終るころ、組くみ下したの若者が、十名

あまり、集つてきた。わしは、一と通りの探險注意を与えると、一行の先頭に立ち、静かに、構内こうないを、第九工場に向つて、行進を始めたのだった。地上を匍はうレールの上には、既に、冷よっゆい夜露

が、しつとりと、下りていた。

「電纜工場ケーブル工場は、夜業をやつてるぜ」

「満洲へ至急に納めるので、忙しいのじゃ」

誰かの声に、そつちを見ると、電纜工場だけが、睡り男の心臓のように、生きていた。高い、真黒な大屋根の上へ、鉛なまりを鎔かすと炉ろの熱火ねつかが、赫々あかあかと反射していた。赤ともつかず、黄ともつかぬそ其の凄まじい色彩は、湯のように沸たぎっている熔融炉ようゆうろの、高温度を、警告しているかのようなであつた。

「組長さん」組下の源太が云つた。「おせいさんは、もう身体は、いいのですかい」

おせいめかけは、実は、わしの妾めかけだつた、だが、世の中の妾とは違つ

て、昼間は、この工場で働かせ、わしの顔で、ケーブルペーパー電纜の紙捲きと
いう軽い仕事をやらせ、日給は、女性として最高に近いものを、
会社から払わせてあつた。夜になると、身粧みつくろいをして、合宿か
ら抜け出してくるわしを迎えて、普通の妾となつた。

「うん、もういいようだ。今夜も、あの電纜ケーブル工場で、稼かせいでいる
位だア」

「うふ。組長は、万事ばんじぬかりが、ねえな」

「なんだとオ——」わしは、ピリピリする神経を、やつとのこと
で抑おさえつけた。「ちよつと電纜ケーブル工場へ寄つてくるから、五分間ほ
ど、ここで待つていて呉くれ」

わしは、間もなく出てきた。

電纜工場を通りすぎると、その先は、文字どおりに、無人郷であつた。

漆黒しつこくの夜空の下に、巨大な建物が、黙々もくもくとして、立ち並んでいた。饅すえくさい鏽鉄さびてつの匂いが、プーンと鼻を刺戟した。いつとはなしに、一行は、ぴつたりと寄り添い、足音を忍ばせて歩いていった。

「うわッ！」

建物の軒下を伝い歩いていた男が、悲鳴をあげた。皆は、ギョツと、立ち停つた。

「な、な、なんだッ」

「工場に、墓がまがえるが出るなんて、知らなかつたもんで……」

きまりわるそうな、低い声だった、

「ドーン」

二三間先の、鉄扉が、鈍い音を立てて鳴った。

「ウウ、出たツ！」

「や、喧やかましいやい！」

わしは唳どな鳴った。墓がえるを蹴飛ばした先生は、黙っていた。

ひい、ふう、みつつ！

やっと、第九工場の、入口が見える。

ぼつと、丸い懐中電灯の光の輪がぶつつかった。

錠前には、異常がない。門衛から借りてきた鍵で、それを外はずさ

せた。ガチャリと、錠の開いたのが、骨の崩れる音のようだった。

「ギア皆、懐中電灯を消すんだ」わしは扉の前に突立って云った。
「静かに、中へもぐりこんだら、たとえ、どんな吃驚するよう
なことが起ろうと、声を立てちゃ、ならねえ。よしかッ。懐中電
灯も、わしが命令するまでは、どんなことがあつても、点けるな
よッ。折角せつかくの化物を、遁にがしちまうからな。いいかッ」
一同は、それぞれ、肯うなずいた。

重い鉄扉を、細目にあけて、ブルブル慄ふるえている組下連中を、
一人一人、押込んだ。最後にわしが入って、扉をソツと閉めた。
工場こうばの中は、油の匂いが、ポンポンしていた。そして、鼻をつ
ままれても判らぬほど、絶ぜつ対たい暗あん黒こくであつた。何かしら、闇の
中から、大きな手が出てきて、喉のど首くびをグツと締めつけられるよ

うな気味の悪い圧力を感じたのだった。

誰もが、黙っていた。番号をかけるわけにもゆかない。わしは、戸口のところから、手さぐりに、一人、二人と、人間の身体を数えて行つた。彼等は、わしの手が触る度に、非常に驚愕してゐる様子であつた。そして、申し合わせたように、隣り同士がピタリと身体を寄せ、手を繋ぎ合わせていた。

「十三人！」たしかに、全員が、入口に近い壁際に、鯀のように、ピッタリ、附着しているのであつた。

それから、時が軸の上を、静かに移つてゆくのが、誰にもハッキリと感ぜられた。時の経つのに随つて、一秒また一秒と、恐怖の水準線が、グイグイと昇つてくるのだった。

もう堪りかねたものか、一行のうちから、サツと、懐中電灯の光芒こうぼうが、射るように、高い天井を照した。

「がーッ、がーッ……」

一同は、その怪音のする方を、等ひとしく見上げた。

「呀あッ！」

「ク、クレーンが……」

懐中電灯の薄ら明りに、はじめて照し出された怪物は何であつたろうか。それはあの巨大な鉄骨で組立てられたクレーンが、物もののすさまじい響きをあげて、呀あッという間に、全速力で一同の頭上を通り過ぎたのであつた。

「ひえーッ」

というなり、彼等は、折角せつかく手にした懐中電灯も其場そのばに抛り出して、云いあわせたように、ペタペタと、地上に尻餅をついてしまった。

「電灯を、点けろツ」

わしは、クレーンがまだ動いている裡うちだったが、決心をして、号令をかけた。そして真先に、懐中電灯を照して、一同の方へ向けた。彼等の顔は、いずれも、泣かんばかりの表情をして見えた。

「しっかりしろ、探険は、これからだツ」

わしは、一同を激励げきれいした。

皆の懐中電灯が、揃って点くと、大分場だいぶんじょう内ないが明るくなつて、元気がついたようだった。

「クレーンを動かすスイッチが、入っているかどうかを調べるんだ。オイ、政まさはいるかッ」わしは、クレーン係の、若い男を呼んだ。

「へええ」と政は、死人のような顔を、こつちへ向けた。「どうか、その役割は、勘弁しとくんない」そう云つて、彼は、手を合わせて、こつちをおが拝んだ。

「莫迦ばかいうな」わしは叱りつけた。「手前てめえが、調べねえじゃ、係りで無えコチトラには訳が判らねえじゃねえか」

尻込みする政を、両りょうわき脇から引立てて、捜査に取懸った。

「このスイッチは、開いている」一同が入った入口の側の壁上で、その入口から六、七間奥まったところに大きいスイッチが

取付けられてあつた。その硝子蓋ガラスぶたの上から指ゆびさしながら、クレール係の政が呻うなつた。「このスイッチが、開いているなら、クレールの上へ、電気が行きつこ無いんです」

「だが可怪おかしいぞ」とわしは云つた。「クレールは確かに動いたんだ。クレールはモートルでしか動けないんだ。このスイッチが開いていて動く筈はない。開いているようでも何処か、電気が通うようになってるんじゃないか。よく中を開けて調べて見ろ」

カチャカチャと音をさせて、スイッチの硝子蓋を開いてみたが、それは普通のスイッチが、明らかに開かれた状態になつていて、外にインチキな接続は発見せられなかつた。

「たしかに、このスイッチは開いています」政は泣き声で云つ

た。

「よし、では念のために、クレーンの上へ昇ってみよう」わしは云った。

「なに、クレーンへ昇る——」

一同は、互たがいに顔を見合わせて、恐怖の色を濃こくした。

「政、昇れ！」

「いやア、救たすけて下さい」政は、ポロポロなみだ涙を出して、喚わめくのであつた。

「じゃ、わしが先登せんとうに昇るから、直ぐうしろから、ついて来い。いいかッ」

わしはそういうなり、壁際へ進んで、クレーンに攀よじ昇のぼる冷い

タラップ
鉄梯子へ、手をかけた。

5

「矢張り、クレーンのスイッチも、開いています」

三人の男にさんざん世話をやかせ、ようや漸くわしのあとから、クレーンの上まで担かつぎあげられた政は、モートルの横の、配電盤をひと目見ると、恐おそろしそうに、そう云った。

「そうか。たしか確に、それと間違まちがいが無けりや、降りることにしよう」

わし達は、また困難な鉄梯子タラップを、永い時間かかって、一段一段と、下りて行つた。

下まで降りきらない裡うちから、残つていた連中は、クレーンの上のスウィッチが開いていたか、どうかについて、尋たずねるのであつた。

「政に見て貰もらつたがな」わしは一同の顔を、ずツと見廻みまわした。

「クレーンのスウィッチも開いていたよ」

「それじゃ、いよいよあのクレーンは……」そこまで云つた職工の一人は、自ら恐ろおそしくなつて、言葉を切つてしまった。

「……電氣の力で動いたのでは無い、ということになる」とわしは、代りに、云つた。

「誰が、動かしたんだッ」

「上つて、四方しほうに気をつけて見たが、隠れてる人間も居なかつた。
なア、源太げんた、友三ともぞう、雲的うんてき」

「そうだ、そうだ」

「もつとも、人間一人で動くようなクレーンじゃない」

「ああ、すると誰が動かしたんだ」

「組長さん。もう我慢が出来なくなつた。どうか、ここから出して下せえ」

「俺も、出るッ」

「いや、出ることならぬ」わしは呶鳴どなつた。「クレーンを動かした者が、判らぬ限り」

「組長さん、そりや無理だよ」源太が泣き声を出した。「ありや、生きてる人間のせいじゃないんだ」

「なんだとオ——」

「あのクレーンには、何か怨おんりょう霊が憑ついていて、そいつがクレーンの上で、泣いたり、クレーンを動かしたりするんだ」

「ああッ——」

それを聞くと、誰もが、痛いところへ触さわられたように、跳とび上りつて駭おどろいた。

「おお、組長」雲うんてき的が云った。「誰かが、外で喚わめいているよう
ですぜ」

「なに、外で喚わめいているッ」わしは、予期しないことに吃びっくり驚おどろし

て云った。なるほど、多勢の声で、何やら喚いているのが、遙かに聞こえるのであつた。「じゃ、みんな、外へ出よう」

一同は、ワツといつて、入口の扉の方へ、先を争つて駆けだした。ガラガラと、重い鉄扉が、遠慮会釈なく、引き開けられる物音がした。

「おう、組長、大変だア」 瘖高い声で叫ぶものがある。

わしは、ギクリとした。

「組長」わしの胸倉むなぐらに縫すりついたのは、電纜工場ケーブルこうじょうの伍長ごちやうをしている男だつた。「おせいさんが、大変だツ」

「なに、おせいが、一体どうしたというんだ」

「おせいさんが——」伍長は、苦しそうに言い淀よどんだ。「おせい

さんが、キユーポラ熔融炉へ、まっさかさま真逆に、飛びこんでしまった」

「熔融炉へ、飛びこんだ、というのかッ」

わしは、それを聞くなり、おせいの働いていた電纜工場めがけて、矢のように駆け出した。

わしのあとには、組下のものや、さんじ惨事を報せに來た連中が、タバタと追いついて來るのであった。

電纜工場の入口を一步入ると、せいさんきわ凄惨極まりなき事件の、息詰

まるようなふんいき雰囲気、感ぜられるのだった。皎々たる水銀灯の

光の下で仕事をする人々は、技師といわず、職工といわず、場内

のいちぐう一隅に据えられた、高さ五十尺の太いキユーポラ熔融炉の周囲を取巻い

て、一斉に上を見上げていた。熔融炉の側には、松の樹をたお仆した

ような大電纜だいケーブルが、長々と横よこわっていたが、これは忘れられたように誰一人ついていないものは無かった。

「駄目だア、何にも見えねえ」

「着物の端も、残っていいえよ」

そんなことを叫びながら、熔融炉の頂上に昇っていたらしい男だ工達んこうが、悲痛な面持をして降りて来た。白い手術着を着て駆けつけた医務部いむぶの連中も、形のない怪我人けがにんに対して、策ほどこの施しようも無く、皆と一緒に、まごまごしているだけだった。

「どうも、お気の毒でしたが」工場長が、わしの傍へ近づくと、興奮した語調で云った。「気がついたときは、おせいさんが、もう熔融炉キユーポラの、殆んど頂上まで、昇っていたんです。でも、それと

気がついて、（停めろ、下りろ）と、下から叫びましたが、何も聞えない風で、アレヨ、アレヨと云っているうちに、火焰かえんの中へ飛びこまれたようなわけで……」

わしは、云うべき言葉もなかった。

「おせいさんは、覚悟の自殺を、やったら幸いですよ。どうした訳か判りませんが」この工場の組長が、続いて口を挟はさんだ。

そこへ、ドヤドヤと皆みんなを掻かきわけて、前へ、飛び出した者があった。

「ああ、死んじまった。おせいさん、俺を残して、何故死んでしまったのだ」

気が変になったように喚いているのは、クレーン係の政だった。

「オイ、政。どこへ行くんだ」政に追い縋すがっているのは、雲うんてき的
や源太だった。

「おお、おせいちゃん。おれも、直ぐ行くよオ——」
「おい、待てと云つたら」

政は、恐ろしい力を出して、源太を投げとばすと、呀あツという
間に、熔融キユーポラ炉の梯子の上へ、ヒラリと飛び上つた。

工場の人々は、まだ生々なまなましい惨事なまなまのあとに続いて、どんなこ
とが起ころうとしているかを、早くも悟さとつて、戦慄せんりつの悲鳴をあげ
た。

「早く、あの男を捉つかまえろ！」

「引ずり下ろせ、あいつは死ぬつもりだぞ！」

「誰か、助けてえ——」

わしは、身体を動かした。邪魔になる人を押しつけて、キユーポ熔融
 炉ラの梯子の下まで来たときに、一足早く、雲的の奴が、梯子はしごに
 手をかけていた。

「うぬツ」

わしは、雲的を、つきとばした。

「わしが助ける」

鉄梯子つかまに掴つかつて、上を見ると、政は、きそくえんえん氣息奄々たる形である
 が、早くも半分ばかりの高さまで登っていた。わしは、ウンと、
 腰骨に力を入れると、トントンと、手拍子と足拍子と合わせて、
 梯子をスルスルと攀のぼつていった。見る見る政とわしとの距離は、

短縮されて行つた。もう一息で、政の身体に手が届くというところで、わしはツルリと、左足を滑らせた。ワツという溜息ためいきが、下の方から、聞えてきた。もう余すところは、五六尺しかない。ワンワン、ガヤガヤと、焦燥もどかしそんな群衆の声が聞える。わしは、速力スピードをグツと速めた。

気が氣じやなく、上を見ると、政はすでに熔融炉キユーポラの縁ふちから上へ、上半身を出している。機会チャンスは、今を措おいて、絶対に無い。しかしわしの手は、まだ三尺下にしか届かない。

ワンワン、ガヤガヤの声も、耳に入らなくなつた。

政は身体を、くの字なりに、ぐつと曲げていよいよ飛びこむ用意をした。

「やッ！」

懸かけごえ声もろとも諸共、

わしは、身体を宙に浮かせて、左手ゆんでをウンと、

さしのべると、ここぞと思う空間を、グツと掴んだ。――

手応えはあつた。

工場の屋根が、吹きとぶほど大きな歓声が、ドツと下の方から湧きあがつた。

だが、こつちは、右手一本で、熔融炉の鉄梯子を握りしめ、全身を宙に跳ねあげたもんだから、左手ゆんでに政の足首を握った儘まま、どどツと、下へ墜おちていった。右手を放しては、こつちが、たまたらない。ガンと、横腹よこばらを、鉄梯子てつぼしじに打ちつけたがそのとき、幸運にも右脚が、ヒョイと梯子に引懸つた。

(しめたツ)

と思つた瞬間、頭の上からバツサリ、熱くて重いものが、わしを、突き墜おとすように、落ちてきた。そして、呀あツという間に、ヌラヌラと、顔や腕を撫でて、下へ墜落していった。それは、政の身体だった。辛うじてわしが掴んだ政の身体だった。(これを離しては……)と私は懸命こころに泳こらえたが、その恐ろしい重力に勝つことが出来ず、遂ついにツルリと、わしの指の間から脱けて、あいつの身体は、ヒラヒラと風呂敷のように、コンクリートの床を目懸けて、落ちていった。いや、全まったく、政の身体は風呂敷のように、舞いながら、墜ちて行つたのだつた。わしは、どうしたものか、急に笑いたくなくて、クツ、クツ、ウフウフと、鉄梯子に、しがみ

ついた儘まま、暫くは、動くことが出来ない程だった。

6

「これは横瀬さん。珍らしいね。さア、こつちへ入ったり、入ったり」

わしは、珍客の来訪にあつて、だだつ広い、合宿の舎しゃ監かん居間の一室へ招しょうじ入れた。

「今日は、何の御用かな」わしは尋たずねた。

「実は一つ聴いていただきたいことがあるのでして……」横瀬は、例のモジヤモジヤ頭髪かみに五本の指を突込むと、ゴシゴシと搔かいた。「どんな話かしらぬが、言つてごらんせえな」わしはチラリと、置時計の方を見たが、もう午後十時に近かつた。

「じゃ、聴いて貰いますか」そう云つて横瀬は、莨たばこを一本、口に銜くわえた。「これは、俺おれの知つている、或る男の、素晴らしい計画なんだ。ねえ、その男は、自分の情婦おんなを、若い男に失敬されちまつたんだ。いや、おまけに、情婦おんなというのが、若い男の胤たねを宿たちまつた。いいですか。これが普通の場合だったら、旦那どの胤たねだと、胡魔化ごまかせるんだが、生憎あいにくと、その旦那どのというのは、女に子を産ませる力がないことが医学的に判つているのだ。それ

で、胎の子を、胡魔化しようもないので、若い二人は秘かに会って泣きながら相談した。いい智恵も見付からぬ裡に、女の身体はだんだんと隠せない程、変ってくる。とうとう仕方なしに、胎の子には罪なことだが、墮胎だたいをすることに決心をした。若い男は、墮胎道具と、薬品を、さるところで手に入れて、女を呼びだした。二人は非常に人目を忍ぶ事情にあるというのが、これが鳥渡ちよつとでも、旦那どのの耳に入れば、二人とも殺されてしまうに、きまつてる。そこで誰にも知られぬ秘密の逢い場所あというのが必要だったが、それは、たった一つあった。どこだと云うと、若い男の勤めている工場の、クレーンの上だった。若い男は、クレーンの運転手なんだ。工場が引けてしまうと、あの広い内部が、がらん胴

だ。幸い女も、工場の案内を知っていた。というのが、その女も工場に働いていたのだ。女は恋しい男に逢いたいばかりに、真まつくら暗な工場に忍び入り、非常に高い鉄梯子ぼしごを女の力で昇ったり、降りたりしたのだ。さて墮胎手術も、勿もちろん論その高いクレーンの上で、やることになった。若い男は教わって来たとおりに、道具を女の身体に、挿さし入れて、或る薬液を注入した。それは或る時間の後になって、成功したことが始めて判った。しかし女は、暫くの間、工場を休み、病びようが臥しなければならなかった。だが折角せっかくの二人の苦心も水の泡だった。というのが、旦那どのが、女の様子から、疑惑を生じたためだった。その男は非常に嫉妬しつと深い奴やつだったが、人一倍、利口な男なので、それと色には出さず、さまざま

まの苦心をして、情婦おんなをめぐる疑雲ぎうんについて、発見につとめた。鬼神きしんのような其その男は、なにもかも知ってしまった。二人の身しん辺べから、歴然たる証拠も掴つかんだのだった。それより、ずっと前、旦那どのは、大体の輪廓りんかくを知ったので、憎むべき二人に対して、どんな復讐ふくしゅうをしようかと、画策かくさくした。その結果、考え出したのは、世にも恐ろしい二人の自滅計画じめつだった。彼は、二人が墮胎を計った第九工場というのに、(夜泣き鉄骨)という怪談を植うえつけた。その実、彼がコツソリ、夜中になると、工場へ忍びこみ、自分で、クレーンをキイキイ云わせたのだ。最後に、彼自身みづかみが、化物探険隊の先登せんとうに立って、真偽しんぎを確かめたが、上と下のスウィッチが、どつちも開あいているのに、クレーンが、轟々ごうごう

と動いたというので、これはいよいよ、おんりよう怨霊の仕業しわざというこ
とに極きまった。その実、その旦那先生が、先に立つて、一々スウ
イツチを外はずして置いたのだ。怨霊の仕業ということになると、一
番戦慄せんりつを感じたのは、若い男と、例の女だ。二人とも大いに思
い当るところがある。というのは、自分達が手を下して闇から闇
へ送ってしまった胎児たいじの怨霊のせいに違いないと思ひこんでしま
う。さア、こうなると、旦那どのの計画は、いよいよ思つう壺ぼに嵌はま
っていったというわけだ。探険の結果、これは怨霊の外ほかに、理由
がつかないと決定した夜のこと、旦那どののは、夜業やぎようをしている
情婦おんなのところへ行つて、遂に引いん導どうの言葉を渡してきた。それは、
のつぴきならぬ証拠を手に入れたので、明日になったら、警察へ

告発するぞと脅おどしたのだ。情婦は、思い余あまつて、自殺の意を決し、自分の働はたらいている工場の熔融炉キユーポラに飛びこんで、ドロドロに熔とけた鉛なまりの湯の中に跡あと方もなく死んでしまった。こんどは、若い男の番だった。旦那どのは、探險隊の中に、その男を入れることを忘れなかつた。若い男を、ジリジリと苦しめてゆくのが、たまらなく快感そそを唆そそつたのだつた。若い男は、クレーンが独ひとりで動き出す大恐怖だいきょうふの前に、永い間、ひき据すえられていた。更さらに、戦慄せんりつを禁きんじ得えないクレーンの上へ、引張り上げられたり、又降ろされたりした。そこへ、突如として、女の自殺を聞いた。それには旦那どのも遽あわてた位だ。若い男は、女の飛込んだ熔融炉目懸けて、駈け出して行つた。彼も女の跡を追つて、この炉の中で死のうと決

心した。そう思うと、彼は脱兎だつとのように熔融炉の鉄梯子を、かけ上ったのだ。友人の一人が助けようとして、後から上ろうとする
と、そこへ旦那うらどのが、飛び出して、彼をつきとばした。そして、
旦那うらどのは、恨み重なる男のあとにつづいて梯子を上って行った
のだ。これを見ていた人々は喝采かつさいした。それもそうだろう。い
やたった一人を除いてはネ。そいつは、工場の隅すみから、コツソリ
この場の光景を眺めていた俺によく似た男さ、はッはッはッ。だ
が、その男にも、旦那うらどどの復讐が、どのように行われるのか、
見当がつかなかった。ひよつとすると、旦那うらどのは、わざと梯子
昇りの速スピード力を落として、（残念ながら、追いつけなくて、若い
男を殺してしまった！）と云いわけするのかと思っていたが、見

ていると、どうやら、そうではない。いや、それは、鬼のように恐ろしい計画だった。旦那どのの考えは若い男が一旦飛び込んで、熱鉛ねつえんのため赤爛あかれに爛ただれたところで若い男の死骸をひっぱり出すことにあつた。俺は旦那どのが、梯子の上で嬉しそうに笑っているのに感付いた唯ゆい一いつの人間だったかも知れない。若い男は、彼の手を離れて、コンクリートの床の上に叩きつけられたが、二た眼と見られた態さまじゃなかつた。旦那どののは、別に咎とがめられもしなかつた」

「面白い話だなア、若わけえの」わしは、静かに云つた。「だが一つ腑ふに落ちねえことがあるから尋ねるが、探険隊が工場の暗闇の中にいたとき、クレーンが轟ごうごう々と動いた。直ぐ灯あかりをつけたが、

下のスイッチは外はずれていた。いくら其の悪人が器用でも、電気なしで、あのクレーンは動かせないだろうぜ」

「そんなトリックに気がつかない俺ではないよ。その旦那どのは、クレーンを動かすスイッチと、同じ型の、ソレ乙おつがた型スイッチよ、あれを工場の栗原さんから借りて、暗闇で音をたてずスイッチの開閉をすることを練習したんだ」

「出鱈目でたらめを云うな」

「出鱈目ではない。では、証拠を出そうかね。その旦那どのは、工場の入口と、スイッチまでの距離と、その取付けの高さとを正確に測って来て、この舎監居間の前の廊下えんきに、それと同じ遠えんき近んに、借りて来たスイッチをひっかけ、真夜中になると、暗

闇の中で、練習をしたのだ。嘘と思うなら、舎監居間の戸口から六間先き、廊下から六尺の高さのところ、二本の釘跡くぎあとがあるが、その寸法と、工場のスウィッチの位置とを較べて見ねえ。ぴつたりと同じことだ。それから二本の釘の距離は、その旦那どのが借りていたスウィッチの二つの孔の間隔あな かんかくと同じことだが、実はそのスウィッチは製作の際に間違えて、孔の間隔を広くしすぎたので、この廊下の釘の距離も、普通のスウィッチには見られない特別の間隔かんかくになっている筈はずだ。ここらも、宿命しゆくめいてき的な証拠といえ言えるだろう。ウン、ぎやーツ」

わしの手には、お喋り探偵の脳天のうてんを叩き破ったハンマーが、血にまみれて、握られていた。それは、彼氏がお喋りに夢中にな

っている間に、卓子テーブルの蔭から、コツソリ取出したものだ。だが、此この男を殺してしまったお蔭で、隠忍いんにん十年、殺人癖さつじんへきから遠去かっていた此このわしの身体には、久しく眠っていた悪血あくけつが、一時に飢えうに目覚めて、湧きあがってきたようだ。わしの名か？ 「片眼の岩いわ」と云やア、ちつとは人に知られた吾儘わがまま者ものだ
なア。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1932（昭和7）年8月号

※底本の「c.c.」は「※[#全角CC、1-13-53]」で入力しました。
※「わし達の周《まわ》りには、「の「わし」にのみ、傍点がないのは底本通りです。

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜泣き鉄骨

海野十三

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>